

研 究 集 会

古代末期のキリスト教巡礼の諸相 Aspects of Christian Pilgrimage in Late Antiquity

足 立 広 明
Hiroaki ADACHI

The aim of this report is to survey the development of pilgrim movements in the Mediterranean world of Late Antiquity. I especially focus on a diary written, by a woman pilgrim named Egeria, and on the sacred place, Hagia Thecla, she visited. Christian pilgrimage started with the promotion of the Christianized Roman Empire. However, without popular acceptance, its further development would not have been attained. The first tide of monasticism accompanying the cult of saints and relics contributed to the rise of Christian communities in every country in Late Antiquity. Within this monastic rising tide, many recent scholars have paid attention to women's involvement in the pilgrimages. Under the name of pilgrimage, the women managed to be benefactors, travelers, and even to be writers or preachers who had a good ability to express their own words. Thecla, the heroine of the *Apocryphal Acts of Paul and Thecla*, might reflect the authority of such women in the early Christian movement. Probably, Thecla cults encouraged Egeria to express her own delight when she met her friend Marthana.

At the end of this report, I included a short introduction of the recent gender interpretation of Thecla cults and spoke of an aspect of the pilgrimage site as a meeting place of different ethnicity.

は じ め に

キリスト教の巡礼といえば、中世以降のサンチャゴ巡礼や、近代になってからのルルドへの巡礼などが有名であるが、キリスト教巡礼最初の興隆期はまだローマ帝国が健在で、なおかつキリスト教化していた時代に訪れていた。四世紀初頭のコンスタンティヌス帝によるキリスト教公認と帝国統一以後、イエルサレムをはじめとする東方各地のキリスト教ゆかりの地は帝国の後押しで聖地化され、巡礼のための街道も整備された。この挺入れは民衆の受容するところとなり、巡礼は地中海の東西南北を行き交い、東方聖地の聖遺物が西方にもたらされてキリスト教信仰が地域に根ざしていく核となっていく。また、巡礼や聖人・聖遺物崇敬と密接に連動しながら、キリスト教の初期修道運動が誕生し、東方から各地に伝播した。七世紀のイスラームの登場以前、まだ地中海世界が緊密に結び合わされていた古代末期において、巡礼は人々に共通する宗教的イメージを与え、後世のすべてのキリスト教社会の基礎を形作ったのである¹（図 I）。

本報告は、この古代末期の地中海世界における巡礼について、これまでの報告者の研究を踏まえて、とくに女性巡礼エゲリアの残した『巡礼記』と彼女が崇敬する女性聖人テクラの聖地について中心的に紹介しつつ概観したものである²。エゲリアはヒスパニア北西部もしくは南部ガリア出身と目され、そこから東方聖地に旅して、イエルサレムを起点にエジプトやパレスティナ、最後にシリアから小アジアを経て故郷に戻ろうとした。シリア東部のエデッサに到着したとき、彼女は現地主教に地中海の西の端から東のこちらへよくやってきたと歓迎された³。地中海がまだ東西の緊密に結ばれた世界であった時代、古代末期の巡礼の心性

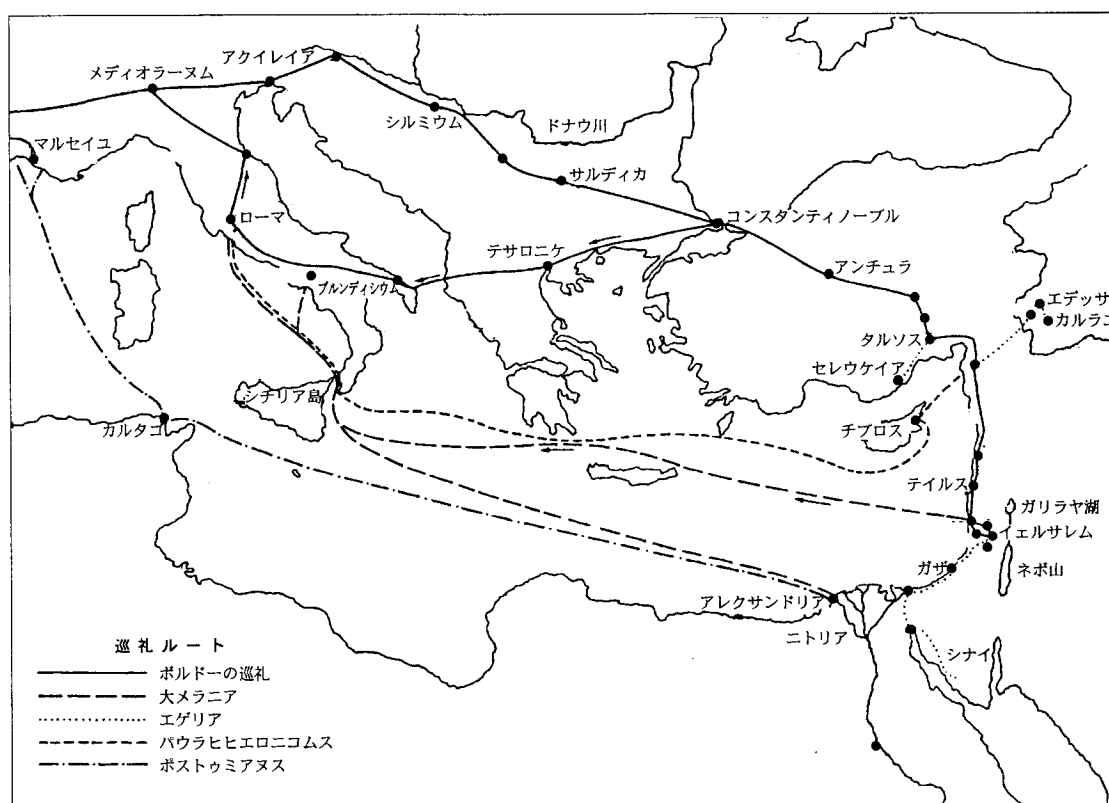


図 I E. D. Hunt, Holy Land
(*Pilgrimage in the Roman Empire*, AD312-460, Oxford, 1984, p. 53より引用)

を女性の目からよく伝えてくれるのである。古代末期の巡礼は、聖地の情景にキリスト教的な意味づけを持たせて語ることによって人々の記憶を形成することに一役買っていた⁴。小アジア南東部のキリキア地方で、聖テクラの遺跡を訪れた彼女の目に映ったものはどのような情景であったのだろうか。

1 : キリスト教巡礼のひろがり

a) コンスタンティヌス以前の時代

キリスト教における巡礼がいつから始まったかについては議論が分かれる。信仰を持ってこの世で生きていくこと自体が巡礼であるとの考えも可能であるが、しかし、こうした考え自体、教父時代にその当時地中海の東西でさかんであった現実の巡礼を背景としつつそれへの対抗概念として生み出されたものであって、巡礼とはまずは現実に聖地を訪れる旅を行なう旅として存在していたということは確認しておいてよいだろう。

この意味での巡礼はコンスタンティヌス帝とその母ヘレナ皇太后によるエルサレムの聖地化と巡礼街道の整備をもって始まると見ることができる。ただ、彼らに先行してすでにエルサレムがキリスト教徒たちの間で特別な場所として意識されていたことは確かで、皇帝権力の介入による聖地や街道の整備も、このような下地を利用することであったことは念頭に置いておいてよい⁵。また、エルサレム以外にも、各地で生じた迫害の犠牲者である殉教者が神と人を取りなす聖人として崇敬され、彼らに由来する聖遺物の奇跡的治癒能力への信仰が高まっていた。

元首政時代のローマでは、二度のユダヤ戦争でエルサレムは破壊され、ハドリアヌス帝のもとでローマ都市アエリア・カピトリナと改称され、ローマ風の神殿が建設されていた⁶。しかし、すべての記念物を抹消できるはずもなく、周辺には記憶を呼び覚ます事物が存在していた。それらは初期キリスト教の伝道者や殉教者によってさまざまに語られていた。たとえば、160年頃のサルディスのメリトンが『過越について』

Peri Pascha でイエルサレムやベツレヘムの様子について触れ、またエウセビオスの師、パンフィリオスがディオクレティアヌス帝の迫害下の310年、総督の尋問にこの都市名をアエリナ・カピトリーナと言わずに頑としてイエルサレムと言って殉教したと言われている⁷。

このような殉教者を「巡礼」と定義してよいかは疑問である。おそらく当人は「巡礼」という自覚を持たなかったであろう。しかし、上述のように彼らの存在が後世の巡礼熱の高まりの素地となっていたのであろう。

b) コンスタンティヌス帝の時代

古代末期の巡礼が大規模に行なわれるようになったのは、上述のようにコンスタンティヌスによるキリスト教公認以後のことである。キリスト教徒は隠れることなく聖なる場所を訪れることができるようになった。それどころか、帝国によって旧約・新約ゆかりの聖地を結ぶ巡礼街道が整備され、キリスト教ローマ帝国の聖都としてイエルサレムが創出されるに至った。冒頭にも記したが、キリスト教巡礼最初の隆盛の時代がキリスト教化したローマ帝国の時代に訪れていたことは銘記されてよい。とくに、イエルサレムがキリスト教の支配者によって統治されてその聖なる都とされていたのは史上約三百年間のみ、すなわちコンスタンティヌス帝から七世紀初頭のイスラームのシリア侵入までの時期に限定されることは、一般にもっと認知されてしかるべき歴史的事実であろう。後の十字軍時代に西欧の騎士団がイエルサレムを占拠する時期があったが、周囲のイスラーム諸国はもちろん、在地の東方キリスト教徒住民とも亀裂を深めた。一方、古代末期のキリスト教巡礼は東西ヨーロッパのキリスト教世界のみならず、イスラーム成立の背景要因にもなっており、西洋史や西南アジア史の枠を超えた学際研究が待たれる⁸。

コンスタンティヌス帝は312年にミルウィウス橋の合戦で僭称皇帝マクセンティウスを破り、ついで翌313年ミラノ勅令でキリスト教を公認したが、324年に帝国統一をするや、帝国をキリスト教化するための政策を加速させた。翌325年にはニカエアで全地公会議を開催してキリスト教の正統教義の制定に介入し、続いてその翌年326年、後世の聖十字架伝説のもとになった皇太后ヘレナによるイエルサレム巡礼とゴルゴタの丘訪問が挙行された⁹。これは偶然ではなく、この都市を異教都市アエリナ・カピトリーナでもユダヤ教の聖地イエルサレムでもなく、新しいキリスト教帝国の聖地として作り変えようとしたものと見てよい。キリスト生誕教会や聖墳墓教会が建設され、そこを人々が詣でるべく道路も整備されはじめたのである。こうした帝国による建設活動にあって、333年には現在のフランス、ボルドーから巡礼者が訪れ、最初の詳しい巡礼記録を残すに至っている¹⁰。

c) 四世紀後半から五世紀前半ーキリスト教巡礼最初の全盛時代

古代末期の巡礼熱の高まりは、四世紀後半から五世紀前半にかけてひとつの頂点に達する。ディオクレティアヌス帝による帝国再建から約一世紀、東方では新首都コンスタンティノーブルが安定した成長ぶりをみせ、一方まだ西ローマ帝国も命脈を保っていた。西方ではアウグスティヌスが、東方ではヨハネス・クリュストモスが同時期に膨大な書物を書き、熱情的な説教を行っていた。その後西方はゲルマン人の侵入の時代となっていくが、東方よりもたらされた聖遺物が各地域の修道院や司教座などで保管され、その地域の信仰や司教権力発展の核になっていく。七世紀初頭、イスラームが登場する直前にキリスト教は聖人崇敬や修道運動と連動した巡礼活動などによって北はアイルランドから南はエチオピアまで、ローマ帝国の領域を超えて広がっていたのである¹¹。

巡礼とかかわりの深い聖遺物崇敬の拡大と初期修道運動について概観してみよう。たとえば、先述したヘレナ皇太后がゴルゴタ訪問の折古い釘を発見し、これがイエスを磔にした十字架に打ち付けられたものと喧

伝されたが、やがてそれにいっそう尾ひれが付き、四世紀後半になるとイエルサレムの教会に立派な聖十字架が鎮座するばかりか、それを削り取って持ち帰ろうとする不心得な巡礼があるので、現地聖職者が監視するようになっていた¹²。また、キリストやモーセなど聖書に直接由来する遺物ばかりでなく、殉教者や同時代のエジプトやシリアで修行する聖人たちの遺骸、衣服なども奇跡的治癒能力をもつとされ、それらは多くの巡礼によって西方へ持ち帰られ、各地域の信仰発展に役立てられることになった。さらに注目すべきは生きた聖人の存在である。彼らは東方の砂漠という舞台で、巡礼という観客を前に演じる俳優であり、彼らの修行や奇跡の物語は各地で熱心に読まれ、彼らに直接会見してその教えを受けようと巡礼が訪れた¹³。

当時、エジプトでもシリアでも、あるいは小アジアでも最初の修道士が砂漠で修行し、地域の人々から聖なる人、ホーリー・マン¹⁴として崇敬されていた。彼らと会い、彼らから直接アドバイスをもらい、その使用品の一部を譲り受けたりするためにも人々は巡礼に出かけたのである。たとえば、シリアのアンティオキア郊外で柱に登って修行していた柱行者、もしくは柱頭聖人のシュメオンがその最も有名な一例で、彼の修行地テラニッソスには数多くの巡礼が訪れていた¹⁵。彼は村人と村人の土地や水利を巡る争いの調停からはじまって、徴税や兵役を迫る都市参事会員から地域住民を保護し、また遊牧民を改宗させ、後には帝国の教義論争にからんで皇帝にも影響を与えたと言われ、また人間だけでなく、動物たちまで従えたという伝説がある¹⁶。

巡礼者は東方の各地から、イエスや聖書ゆかりのものばかりでなく、こうした各地の聖人ゆかりの物品も入手して故郷に持ち帰った。そして、それらの聖遺物は持ち帰られた地域で靈驗あらたかな奇跡を起こし（じっさいには現地司教や修道士の関与が背景にあったのであろうが）、地域信仰を育み、ローマ帝国解体以降もキリスト教共同体が自立・成長する手助けとなっていく¹⁷。皇帝の建築活動や、各地の聖人たちの修行地が聖地化するなどしてつなぎ合わされた巡礼街道が整備されると、それまでとはまったく異なったキリスト教的ランドスケープ（景観）が創り出され、それと連動する心性が誕生していくことになる。巡礼たちは聖地の景観を記憶し、それを故郷で待つ人々に語り伝えた。その記憶と伝達の作業によって、キリスト教世界そのものが姿を現すことになるのである。

意外なことに、キリスト教世界誕生と密接にかかわるこの古代末期のキリスト教巡礼について、最も詳細な記述を残しているのは男性ではなく、女性の巡礼である。それが冒頭で言及したエゲリアで、彼女は故郷で待つ信仰をともにする女性たちに東方聖地の情景を伝えることを旅の目的として日記風の記録を残した。これが古代末期の巡礼研究において非常に重要な史料となっている。じっさい当時の巡礼では女性が非常に活躍し、彼女たちの財政支援もあって教会が成長するとともに、彼女たちもまた巡礼参加の名目で旅をし、仲間とコミュニケーションを取り、自らを表現する手段を手に入っていたようなのである。女性たちの関与は古代末期のキリスト教巡礼を確実に支え、活性化する要因となっていた。つぎに、古代末期の女性たちの巡礼についてエゲリアを中心に展望してみよう。

2：古代末期の女性巡礼—とくにエゲリアについて

a) 古代末期の女性巡礼

上述のように、古代末期に現実に受け容れられた巡礼を語る際に注目されるのは、女性巡礼の事例が目を引くという事実である。たとえば、ヒエロニムスに示唆され、彼のスポンサーともなりつつ、彼とともに東方聖地を訪れたパウラとエウストキウムの母娘や、逆にこのヒエロニムスにぜいたくと非難された金持ちの女性巡礼ポエメニアの存在などが容易に指摘されよう¹⁸。しかし、彼女の事例は教父の見解と異なった現実の巡礼のありようを伝えているとも考えられる。当時の巡礼や修道運動は、こうした女性たちを惹きつ

けることで成長していたと思われるからである。

当時の西ローマ帝国では数多くの元老院身分女性が修道生活や巡礼で名を上げていた。なかでも有名なのが小メラニア¹⁹で、同時代的にはその名声はアウグスティヌスをはるかに凌いでいた。その名声と権威は修道的修行と巡礼によって獲得されたものである。彼女はローマ元老院身分の最富裕家庭に生まれ、その財産を貧民と教会に寄進したのち夫とともに北アフリカへ渡り、後にエジプト、イェルサレムなどで修行した。夫の死後も彼女は単独で修行した。その名声はコンスタンティノーブルのテオドシウスⅡ世にも聞こえることとなり、宮廷で神学について講義し、後オリブ山に隠遁して女子修道院を建設して後進を指導して生涯を終えたと言われる。彼女の事例は女性が巡礼活動を通じて資産運用の自由や場所の移動の自由、あるいは思想や意見表明の自由を獲得したものとして1980年代以後フェミニスト歴史家の注目を集めてきた²⁰。

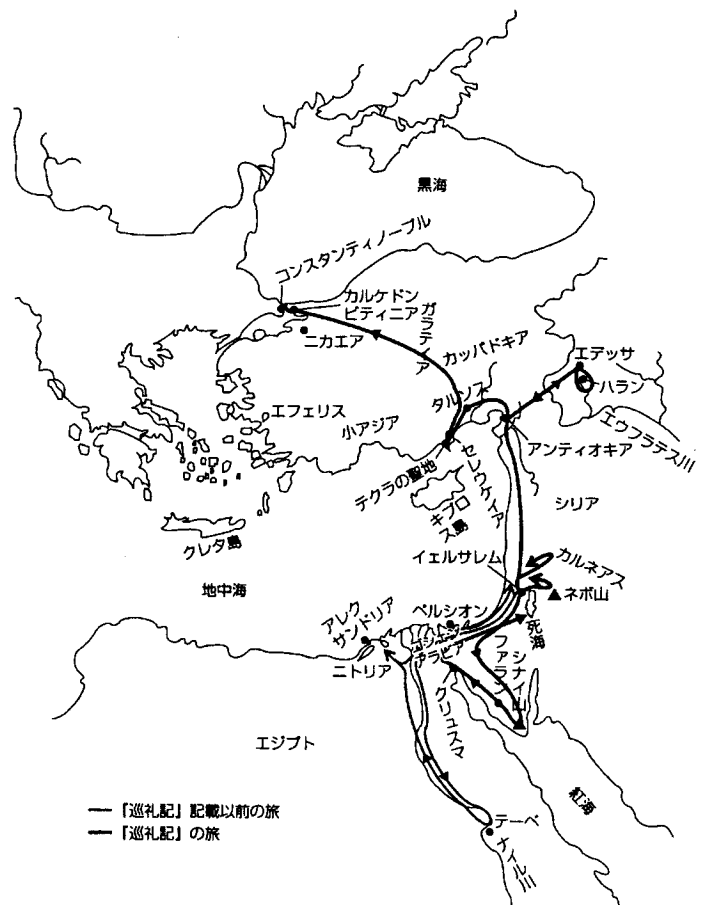
そのメラニアに刺激を受けたのが皇女エウドキアである。彼女はアテナイの哲学者の娘として生まれ、テオドシウスⅡ世帝の妃となっていたが、メラニアの説教に感動してきらびやかな行列とともに東方巡礼の旅にでかけ、道すがらアンティオキアなどの町々で施しをした。しかし、後に夫と不仲となり、事実上の離婚をさせられ、流刑先のベツレヘムで隠遁したが、同じく中央政府から異端扱いを受けていた単性論派の人々に聖人として迎えられることになる。彼女の事例は異教世界からキリスト教世界に移行していく古代末期における女性の姿を伝えるものとして注目を集めてきた²¹。

b) 女性巡礼エゲリア

こうした女性たちのなかでも、女性自身の執筆になる貴重な史料を残してくれたのがエゲリアである。

彼女は上述のごとくヒスパニア北西部もしくは南部ガリアの生まれとされ²²、381-384年にイェルサレムを起点に各地を巡礼したと推定されている(図Ⅱ)。彼女は故郷で待つ同じ女性信者仲間宛てに詳細な『巡礼記』を執筆しており、女性史的な視点を離れても、古代末期の巡礼を語るあらゆる研究文献に対して貴重な情報源となっている。彼女の描写の特徴は抽象的な理念を語らず、具体的な情景描写によってキリスト教ローマ帝国の整備したその当時の景観を今に伝えているところにある。

彼女は『巡礼記』前半でイェルサレム以外の各地を歴訪したじっさいの巡礼の様子を描き、後半でイェルサレムの教会とその典礼儀式の様子を克明に描写している。前半の巡礼部分についてみると、エジプトからシナイ山にかけてモーセの出エジプト紀ゆかりの土地を巡り、イェルサレム帰還後パレスティナのヨブの墓、シリアのエデッサでのアブガル王のもらったイエス直筆の手紙探訪の旅などで、旅の終わりに女性聖人テクラの聖地を訪問している²³。どこの土地に行っても、彼女は徳の高い、親切な主教



図Ⅱ エゲリアの巡礼ルート

歴史学研究会編『巡礼と民衆信仰』青木書店、1999、拙稿「古代末期のキリスト教巡礼と女性－エゲリアの場合」p.70より引用。

か修道士に歓待される。それ自体は一種の定型表現とも思われるが、行く場所の状況に応じて聖地を守る者が教会の主教であったり、修道士であったりする相違は現実的であり、彼女の一行を宿泊させ、聖地に同行してその謂われを解説して祈りを捧げ、エウロギアと呼ばれる手土産を持たせて次の聖地までの旅の気遣いをするなどの様子からは、すでに各聖地が巡礼を迎える態勢を整えていたことが見て取れる。場合によれば軍隊が街道を守護している事例も言及されており²⁴、女性史を直接の目的としない従来の研究においてもエゲリアの『巡礼記』は古代末期の地誌や聖書考古学への傍証史料として極めて重宝されてきたのである。

しかし、近年彼女の『巡礼記』に関心が再び集まってきたのは、執筆者が女性であり、また故郷で待つ仲間たちも女性であったことによる。故郷の仲間への手紙は、仲間に鮮明なイメージを与え、記憶を形成するのに与かってあまりあるものだったことと推測される。それは巡礼を通じて女性が交わした相互コミュニケーションの実相を伝えるものであり、また女性が巡礼という名目で獲得した移動の自由を示すものである。

とくに私が注目してこれまで多くの論稿で書いてきたのは、彼女が女性聖人テクラの聖地を訪問する場面である。彼女は上述のように旅の終わりにテクラの聖地（以後ハギア・テクラ）を訪問した。それはそれまでのモーセやヨブなどの旧約聖書の預言者ゆかりの故地でもなければ、イエスの伝説の手紙が保存されている場所でもなく、彼女の個人的な興味で立ち寄ろうとした聖地であった。エゲリアはこの聖地で一貫して一人称単数の動詞を用いつつ叙述を進めるのだが、女性修行者の監督をしていた友人マルタナとの再会に際して、ラテン語の一人称代名詞主語 *ego* を用いつつその喜びを表現する。多くの論文や報告でこれまでも引用してきた箇所であるが、再度ここに引用しておく価値はあるだろう。

私はそこで一番の親友に遭遇した。全東方が彼女の徳の証言者である聖なる補祭マルタナがその人であった。私は彼女にイエルサレム訪問のときに会ったことがある。彼女はその地に祈りのために上っていたのだ。彼女はアプタクティタエ、すなわち、処女たちの修道院を監督していた。彼女が私を見たとき、彼女と私にどれほどの歓喜が湧き起こったか、書き記すことなどできようか。だが、本題に戻ろう。

Nam inueni ibi aliquam amicissimam michii, et cui omnes in oriente testimonium ferebant unitae ipsius, sancta diaconissa nomine Marthana, quam ego apud Ierosolimam noueram, ubi illa gratia orationis ascenderat: haec autem monasteria aputatitum seu uirginum regebat. Quae me cum uidisset, quod gaudium illius uel meum esse potuerit, nunquid uel scribere possum. Sed ut redeam ad rem ...²⁵

注目すべきは、彼女が会見した人物の実名を記載しているのは『巡礼記』全編でただ一度、このときのマルタナのみであるということである。そのマルタナとこれまた明確に記された『私』= *ego* が出会うのである。報告者がこれまで多くの論文で繰り返しこの箇所に言及してきたのも、ここに巡礼を通じて女性が友情を育み、個としての素直な感情表現を行なっている可能性を見出したからである。末尾に「だが、本題に戻ろう」と書かれているのも、この箇所が本題、すなわちキリスト教の主要な巡礼地を巡ってその様子を仲間に伝えるという、いわば「公的」な任務から外れた、「私的」感情に基づく描写箇所であることを物語っている。

では、他のキリスト教の大聖地と違って、彼女にこうした女性としての私的表現を可能ならしめたテクラの聖地とはどのような場所だったのだろうか。最後にその点を展望しておこう。

3：テクラの聖地と巡礼

テクラは聖書外典『パウロとテクラの行伝』²⁶（以下、テクラ行伝）の女性主人公として知られている。彼女は小アジア中部のイコニオン（現コンヤ）で生まれた裕福な娘として描かれ、まもなく結婚するはずであったところ、突然町に現れた使徒パウロの禁欲の説教に聞き惚れて母や婚約者を無視して彼に従い、怒った母テオクレイアの訴えで火刑に処せられるが神の雨の奇跡で助かり、パウロとともに落ち延びる。これが第一部。続いて第二部では、テクラとパウロの一行がアンティオキアの町に来たところ、町の名士アレクサンドロスに見初められ、テクラがこれをはねつけると恨んだアレクサンドロスにうったえられ、今度は野獣刑に処せられることになった。パウロはこのときテクラを否認して退場し、闘技場でテクラを応援するのは皇女トリュファイナと女性群衆であり、また雌ライオンが彼女の側に立って戦った。このとき彼女はアザラシの堀に身投げをして自らに洗礼を施し、皇女トリュファイナの失神で処刑が取りやめとなるや、テクラは女性群衆に歓呼して迎えられ、その後人々を教えて回り、セレウケイア近くで没したという。

教父テルトゥリアヌスはこの第二部の洗礼場面と人々を教える場面を断罪し、コリント第一書簡で女性に教会内で語ることも許さなかった使徒が洗礼や宣教の権利を授けるはずがないとして、この物語に真正のパウロ伝統を見出そうとする女性信徒に警告を与えた²⁷。しかし、この警告は逆にテクラ行伝に信を置く女性たちの存在を炙り出してしまふ。じっさい、その物語は各地で人気を博し、エゲリアもテクラの聖堂で旅を可能とさせてくれた神への感謝とともに、テクラの行伝をすべて読み上げている²⁸。

ナジアンゾスのグレゴリオスは四世紀後半にはテクラ行伝末尾で伝えられる彼女の墓所、ハギア・テクラ（アヤ・テクラ）に一時期隠遁し、ここで学んでいるが²⁹、このことは四世紀にはこの地がすでに聖地化していたことを示しており、またニュッサのグレゴリオスの記述では彼の姉マクリナが生まれるとき、母エンメリアの夢枕にテクラが立って祝福したという³⁰。エゲリアからやや遅れて、五世紀に名不詳の執筆者によってこの聖地でテクラに捧げて書かれた伝記、『聖テクラの生涯と奇跡』³¹の第二部『奇跡譚』には、病癒しなどを求めてやってくる男女の多様な巡礼の姿が描かれている。そこで描かれる人々は多種多様で、すでにテクラは女性だけでなく、男性も含めて地域の守護聖人化していることがうかがえる。だが、女性に対する保護をその本質として維持し続けていたことは同史料のいくつかの部分から分析することができる。

たとえば、第12章でセレウケイア主教バシレイオスに破門された作者がテクラに励まされる場面では、彼女が自分はマケドニアの女性を助けに行く途中である旨を伝えており³²、彼女にとって女性たちへの援助がまず優先されるということが作者にも共有されていることがわかる。また、これまでの拙論でもしばしば言及した事例であるが、第32章では同じくセレウケイア主教区から派遣された男性聖職者の決定を、テクラに仕える聖地共同体の巫女的な女性たちが覆すことに成功している。「聖テクラのパレドレスでフュラケース」と呼ばれる聖地管理と警護隊長を兼ねた聖職者であるデクシアノスは、セレウケイアからこの地の監督責任者として派遣されていたのだが、近辺の山岳住民であるイサウリア人の襲撃に耐えかねてテクラの財宝をセレウケイアに移送しようとした。しかし、その決定に怒るテクラの顕現を目撃した処女たちのうったえに恐れをなし、この決定を取り消したのである³³。

ハギア・テクラの聖地共同体は近くの都市セレウケイアを見下ろす小高い丘の上にあり、その主教管区に属していたのだが、このように同市主教に破門された作者をかくまって、その人物によって伝記が書かれ、同管区派遣の男性聖職者の権限が及ばない場合があるなど、相互にかなり緊張関係を内包していたことがうかがえる。同じく『奇跡譚』第29章ではパウロの生地タルソスとの軋轢も生じさせている。ハギア・テクラへの巡礼熱の高まりを妬んだタルソス主教マリアノスは、テクラの怒りに触れて腹が破れて死んでしまった³⁴。コンスタンティヌス帝に始まる古代末期の巡礼は、形としては中央主導で始まり、それに呼応する形で各地

に拡大していくのだが、その拡大の内実は地域ごと、さらには巡礼に参加する個人ごとに異なっていたと言えよう。

とくにハギア・テクラの場合、女性が受容し、その興隆に関与したキリスト教巡礼の聖地という側面を持つ。前章のエゲリアがその『巡礼記』で「本題」、すなわちモーセやヨブ、それにキリスト自身に関連するような主要聖地の情景を、故郷で待つ仲間の信徒女性に鮮明に描写して知らせるという本来の任務から離れ、全編を貫く匿名性の原則からも離れて、ただ一箇所同性の友人マルタナの名を挙げつつ自らの喜びを語ることができたのも、この聖地が女性たちにとって特別な意味を有していたからであろう。親友マルタナは現地で女性修道者アプタクティタエの監督をしていたと書かれていたが、上述『奇跡譚』第44章にも現地の女性修道者の指導者の一人としてマルタナの名が挙がっている³⁵。女性たちは婚約者と母を捨て、自らに洗礼を施し、一人放浪して人々を教えた伝説を持つ同性聖人の聖地で相互に交歓を有していたことになる。

ま と め

シンポジウムの報告内容としては以上にとどまる。確認しておくべき重要事項としては、四世紀から七世紀にかけての古代末期の地中海世界において、キリスト教巡礼の最初の高まりが見られたこと。これが後の東西ヨーロッパのキリスト教世界における巡礼やそれと連動する聖人・聖遺物崇敬、修道運動の起点となった。そして、このキリスト教巡礼の高まりには帝国の関与が大きかった。しかし、巡礼の拡大はただ中央の指令で地方に分散するというだけにとどまらない。そこには受容する側の選択が見られるのであり、多くの聖人、聖遺物崇敬の多様なバリエーションがそのことを語ってくれる。本報告で取り上げた女性巡礼エゲリアと彼女の訪問した女性聖人テクラの聖地ハギア・テクラは女性の側から見た、女性の受容したキリスト教巡礼の様相と意味を雄弁に語ってくれるのである。

補遺－ジェンダーとエスニシティの観点から

さて、報告それ自体としては以上のように要約できるであろうが、質疑応答やその後の報告や四国遍路との関係において、以下の補足説明を付け加えておくことは今後の議論の展開においても有益であろう。ひとつはジェンダーとのかかわり、あとひとつはエスニシティに関連する事柄である。

まず、ジェンダーとのかかわりについて。本報告後の質疑において、報告者はテルトゥリアヌスやアウグスティヌスら教父が女性のエヴァ的性格を強調してきた点に言及した。女性は原罪の発生において、男性よりも先に蛇の誘惑に乗ったエヴァの性質を内包するとされ、女性は男性に従属し、その指導に従うよう繰り返し教唆されたのである。しかし、女性は一方では救世主イエスを産んだマリアの性質を持つ者として称揚されもした。これは山代報告において中世における聖母マリア崇敬の興隆との関連で言及された。

エヴァとマリア。キリスト教における女性のかかわりについて議論すれば、必ずこの二つの表象が立ち現れてくる。古代末期においても、431年のエフェソス公会議でネストリウスはマリアが「神の母」として崇敬されていることを咎めたが、かえって民衆の反発を招いて追放されてしまった。彼がコンスタンティノープルの大教会で祭壇を挟んで皇帝の姉プルケリアと対峙し、女性はエヴァの性質を持つので退出してもらいたい旨告げると、対するプルケリアは女性は救世主を産んだマリアの性質を有すると反駁したと伝えられている³⁶。エヴァとマリアの二つの表象がキリスト教の歴史のなかでどのような機能を持っていたかは、今後ともそれぞれに大きなテーマとなろう。

ただ、私は本報告内ではエヴァにもマリアにもあえて言及しなかった。それは80年代以降のフェミニスト

史家たちが、エヴァとマリアという相互補完的な女性役割の表象を離れ、それとは別個の自立的な女性表象を古代史の文脈のなかに探求してきたことに関係する。すなわち、男性との関係性によって娼婦や妻、あるいは母と規定されたのではない表象が求められたのである。その顕著な事例のひとつが報告で取り上げたテクラである。彼女は家族を離れ、後には使徒パウロからも離れて一人成長した。その成長を応援したのは、動物も含めてすべて女性であった。

近年のフェミニスト研究者は初期キリスト教の強い終末思想に注目し、その影響下で地上の性別分業が意味を喪失し、結果的に女性に「自由」がもたらされた可能性を探ろうとする。すなわち、「『子どもを産めない女、産んだことのない胎、乳を飲ませたことのない乳房はさいわいだ』という日が来る」（ルカ、23：29、新共同訳）のである。

地上に明日終末が訪れるなら、産んだ、産まないの差異は意味を失う。また姦淫の罪に身を委ねた女性も同じく罪人である人間が裁く必要はなく、審判は神に任せられることになる（ヨハネ、8：1-11）。新約聖書のなかに散在するラディカルなメッセージは、後世に換骨奪胎されて教会当局によって付与された意味合いにおいてではなく、同時代の聖書外典などの史料とつき合わせて再解釈される。ロス・シェパード・クレイマーはメアリ・ダグラスの人類学的モデルを応用しながら、イエスの集団において「この世」の終わりへの期待とともに「この世」でのジェンダー規範がゆるみ、女性の関与の機会が広がったと指摘しており、新約聖書と並んでテクラの行伝にもしばしば言及している³⁷。

古代末期の巡礼もまた、こうした初期キリスト教の伝統をさまざまなレベルで引き継いでいたと考えられる。様式化が進行し、体制を支える方向に取り込まれていたとは言え、巡礼とはまずは日常から非日常への旅であり、キリスト教の場合それは「この世」の桎梏からしばし離れて「あの世」の救済に接近することを意味していた。とりわけ女性にとって、それは家族への責務から解放されて日常では不可能な旅という行動の自由を得る意味があったと思われる。四国遍路の場合はどうであったのだろうか。終末思想や政治権力の介入とは遠い、近世の庶民の開拓した巡礼であったようだが、そこにも地上の性別役割からの離脱を可能とするなんらかのメッセージを見出すことはできるのだろうか。

四国遍路と比較して、古代末期のキリスト教巡礼のもうひとつの特徴を挙げるとするなら、多様なエスニシティにより構成されていたということがある。すなわち、巡礼はローマ的都市とそれ以外の地域の接点を提供していたのである。ハギア・テクラの場合、そこは近辺のタウルス山脈に住む「異」民族イサウリア人と都市に住む「ローマ」人の出会う場所であった。エゲリアの『巡礼記』には彼らは「とても悪い人たち」でいつも聖地の財宝を狙って襲撃しようとしているように描かれている³⁸。『奇跡譚』では彼らの襲撃の実相が周辺の町々への略奪とともにさらに詳しく記録されている³⁹。

しかし、今日も現地に一部壁面が残る豪壮な聖堂（巻末写真参照のこと）は、彼らの長で皇帝となったタラシコディッサ・ゼノンにより建立されたものであるという。彼が即位後のクーデタで一時期故郷イサウリアに舞い戻っていたとき、夜にテクラが夢に出現して復位を予言し、その通りになったのでお礼として改修したというのである⁴⁰。つまり、彼らは略奪を繰り返しながらもすでにキリスト教に改宗し、都市へ浸透していたことになる。その橋渡しを聖地が演じていたのである⁴¹。

四国の場合、当然参加者はほぼ「日本人」ということになるのであろうが、明治維新以前においてはそうした共通認識は希薄で、さまざまな地方の住民が相互に遭遇するときに摩擦はなかったのか、その「出会い」の結果どのような社会的、もしくは文化的な変容が四国に、あるいは巡礼の故地に起こったのだろうか。蛇足的な問いで終わることになるが、以上の報告と補足が今後の共同研究進展の一助となれば幸甚である。

1 Peter Brown, *Authority and the Sacred: Aspects of the Christianization of the Roman Empire*, Cambridge, 1995,

- p. 78 ; ピーター・ブラウン著 後藤篤子訳『古代から中世へ』山川出版社、2006、68頁などの表現を参照。ただし、ブラウンは巡礼だけのことを言っているのではない。聖人崇敬や巡礼に加えて、北はアイルランドから東はシリア、南はエチオピアに至るまで、同一の聖典を読み上げることの効果を最近では強調するようになっている。
- 2 Maraval, P., *Égérie: journal de voyage*, Sources Chretiennes 296, Paris, 1982. 報告者のエゲリアに関する論文はいくつかあるが、ここでは共著の一章として上梓した最初のを挙げておく。「古代末期のキリスト教巡礼と女性－エゲリアの場合」歴史学研究会編『地中海世界史』第4巻『巡礼と民衆信仰』青木書店、1999年。同史料は最近邦訳が出版された。大田強正『エゲリア巡礼記』サンパウロ社、2002年。
 - 3 *Égérie*, p. 204; 拙論、前掲書 63-64 頁。
 - 4 Gerogia Frank, *The Memory of the Eyes: Pilgrims to the Living Saints in Christian Late Antiquity*, Berkeley, 2000, pp. 1-2.
 - 5 Hunt, E.D., *Holy Land Pilgrimage in the Later Roman Empire AD 312-460*, Oxford, 1984, pp. 1-5
 - 6 Hunt, *Holy Land Pilgrimage*, p. 1.
 - 7 *On Pascha and Fragments / Melito of Sardis*; texts and translations edited by Stuart George Hall, Oxford, 1979 (72: 94); Eusebius, *Historia Ecclesiastica*, (iv, 26-14). ただし、いずれも Hunt 前掲書による。
 - 8 James Howard-Johnston and Paul Anthony Hayward, *The Cult of Saints in Late Antiquity and the Early Middle Ages*, Oxford, 1999などがさしずめそうした学際研究の嚆矢ということになろうか。ピーター・ブラウンの論文“The Rise and Function of the Holy Man in Late Antiquity” (*Journal of Late Antiquity* 61, 1971, pp. 80-101) 発表25周年記念論集の形を取りつつ、中世西欧、東欧、そしてイスラームにおける聖人崇敬が比較されつつ分析されている。
 - 9 Hunt, *Holy Land Pilgrimage*, "2: Constantine and the Holy Land (ii) Helena – History and Legend," pp. 28-49 による。
 - 10 *Itinerarium Burdigalense*, ed. P. Geyer and O. Cuntz, in: *Itineraria et Alia Geographica, Corpus Christianorum, series Latina* 175, Turnhout, 1965, pp. 1-26. ただし、ここでは *Egeria's Travel*, ed. J. Wilkinson, Warminster, 1999, pp. 22-34 の英訳などを参照。
 - 11 Peter Brown, *Authority and the Sacred*, p. 78.
 - 12 *Égérie*, 37:2, pp. 284-286, Wilkinson, p. 155.
 - 13 Gerogia Frank, *The Memory of the Eyes*, p. 2.
 - 14 ピーター・ブラウンが古代末期のキリスト教聖人を教会教義史的な位置づけから離れて、さまざまなほかの地域や時代の聖者信仰と比較検討できるように、上述論文“The Rise and Function of the Holy Man”以後人類学から応用して用いてきた用語。
 - 15 *Théodoret de Cyr, Histoire des moines*, par P. Cavinet, vol. 2, Paris, 1979, p. 158-215; G. Tchalenko, *Villages antiques de la syrie de nord*, vol. 1, 1953, pp. 192-194. 拙論「『聖人伝』に現れた砂漠の苦行僧－古代末期地中海の社会変容におけるその役割」『史林』第72巻5号、123-165頁。
 - 16 Brown, *Authority and the Sacred*, p. 66, 76.
 - 17 現在では数多くの研究があるが、そのパイオニアとなったのはやはりブラウンの次の書であろう。Peter Brown, *The Cult of the Saints: Its Rise and Function in Latin Christianity*, Chicago, 1982.
 - 18 P. Devos, “La "Servante de Dieu" Poemenia,” *Annalecta Bollandiana* 87, 1969, pp. 189-212; Hunt, *Holy Land Pilgrimage*, pp. 76-81.
 - 19 *Vie de Sainte Melanie*, par Denys Gorce, Sources Chretiennes 90, Paris, 1962; *The Life of Melania the Younger*,

- ed. Elizabeth A. Clark, Lewiston, 1984. 邦語論文として次のものがある。長谷川香織「『聖小メラニア伝』における救貧モチーフ：4 - 5 世紀キリスト教女性聖人についての一考察」『立命館文学』565、52-78 頁、2000。
- 20 Elizabeth A. Clark, "Ascetic Renunciation and the Feminine Advancement: A Paradox of Late Ancient Christianity," *Anglican Theological Review* 63, 1981, pp. 240-257.
- 21 Kenneth Holum, *Theodosian Empresses: Women and Imperial Dominion in Late Antiquity*, Berkeley, 1982, pp. 111-128, 176-190などを参照。わが国でも次の書に詳しい。井上浩一『ビザンツ皇妃列伝』筑摩書房、1996 年。
- 22 上述 Wilkinson など近年の大勢はヒスパニア北部説であるが、Hagith Sivan が近年南部ガリア説を提起した。Hagith Sivan, "Who was Egeria? Piety and Pilgrimage in the Age of Gratian," *Harvard Theological Review* 81, 1988, pp. 59-72.
- 23 *Égérie*, 22:1, p. 224.
- 24 *Égérie*, 9:3, p. 162.
- 25 *Égérie*, 23:3, pp. 226-228.
- 26 *Acta Pauli et Theclae*, ed. Richard Adelbert Lipsius and Maximilian Bonnet, in: *Acta Apostolorum Apocrypha* vol. 1, Leipzig, 1898, pp. 235-272. 邦訳：青野太潮訳「パウロ行伝」日本聖書学協会編『聖書外典偽典』第7巻『新約外典』Ⅱ、教文館、1976 年収録、97-113 頁。
- 27 *Tertullianus: De baptismo*, Corpus Chriatianorum 1, Brepols, 1954, p. 215.
- 28 *Égérie*, 23:5, p. 230.
- 29 Grégoire de Nazianze, *Carmen de Vita sua*, Patrologiae Graeca, 37, col. 1067. ただし、ここでは *Vie et miracles de sainte Thecle, texte grec, traduction et commentaire*, par. Dagron, G., Subsidia Hagiographica 62, Bruxelles, 1978, p. 56 参照。
- 30 *Vie de sainte Macrine*, par Pierre Maraval, Sources Chretienne 178. ただし、ここでは以下を参照。Dennis. R. MacDonald, *The Legend and the Apostle: The Battle for Paul in Story and Canon*, Philadelphia, 1983, p. 91.
- 31 *Vie et miracles de sainte Thecle, texte grec, traduction et commentaire*, par. Dagron, G., Subsidia Hagiographica 62, Bruxelles, 1978. 以下『奇跡譚』については各章を M と略す。
- 32 M12, p. 322.
- 33 M32, pp. 374-376.
- 34 M29, pp. 366-370.
- 35 M44, p. 406.
- 36 Holum, *Theodosian Empresses*, p. 153 参照。
- 37 Ross S. Kraemer, *Her Share of the Blessings: Womens' Religions among Pagans, Jews, and Christians in the Greco-Roman World*, NY, 1992, p. 15, 139, 141, 144, 145, 150-152, etc.
- 38 *Égérie*, 23:4, p. 228.
- 39 M5, 6, 19, 27, 28 などがこれに相当。
- 40 *The Ecclesiastical History of Evagrius with Scholia*, ed. J. Bidez and L. Parmenter, London, 1898 (AMS reprint, 1979), Liber III, 8, pp. 107-108.
- 41 M12 ではローマ帝国との平和条約で人質としてやってきたイサウリア人のキリスト教徒貴族女性バッシアネが聖地でテクラの癒しもあって無事出産し、その息子が聖地に建物を建造したと記されている。M19, pp. 340-342.

テクラ聖堂地上部分。人物は案内のベンヤミンさんとサリハさん。



テクラ聖堂地下の礼拝所とテクラの聖像。今も花をたむける「巡礼」がいる。

